長野県短期大学紀要　第58号　2003年12月
Journal of Nagano Prefectural College, No.58, December 2003

長野県短期大学
〒380-8525 長野市三輪 8-49-7

「文学」から「文化」へ ― 共生への視点　その(一)

From "Literature" to "Culture"

横倉長恒　Nagatsune Yokokura

はじめに

昭和二五年、短期大学へ改組して以来の「文学科国語専攻」が、来年度より「日本語日本文化専攻」に変る。この「文学科国語専攻」最後の年に当り、私の長野県短期大学における国語専攻の教員としての在り様を振り返り、「文学」から「文化」に改組されたことで、何が可能になり、何が可能薄になったのかを素描的に検証し、残された奉職期間への布石にしたいと考える。

今回の改組の問題点を幾つか挙げてみると、「多文化コミニュケーション学科」と謳いながら、イスラーム文化の視点が欠如しているのは、どう考えてもおかしい。それを欠いたままの改組案を認めた文部科学省の在り様と共に、この現実を押えて置く必要があろう。

「多文化コミニュケーション学科」の「英語英米文化専攻」・「日本語日本文化専攻」にしてもそうである。この名称を素直に解釈すれば、その構成スタッフの比率について、語学と文化の二対三とか、或いは三対二とかになっているものと解釈するのが常識だろう。しかしその専門性で考える限り、一対四の状況で、現有スタッフでカバーしなければならない関係上止むを得ないとしても、看板と現実の対応力に格差を感じないわけにはいかない。こうした問題を抱えたまま、何故改組を急がなければならなかったのか。それはベストの選択であったのか。それを検証しながら、「日本語日本文化」への責任を果たすためのシフト変更のための考察に入りたい。

一　「県短」改組を考える

私は「文学科国語専攻」の教員として、古代文学を担当して今日に至った。「古代」とは、「文学」とはと問い続け、「古代」には、「規範の発生」すなわち、「文学の発生」を考えること、「文学」には吉本隆明のいう「言語表現」を踏襲して教壇に立って来た。その「文学科」の教壇が不要になったというのである。正直のところ、いささか不満である。短大において、五十有余年続けて来た「文学」研究と「文学」教育を不要とした考えそのものに対してである。必然性があるのであればわからないでもない。しかし実学ばかりを追い求め、国際化国際化、アメリカアメリカと何でもが靡く風潮の中で、しかも世間の「改革」の風潮に流されて、「改革のための改革」が、「定員を割ってからでは遅い」「他所では改革がどんどん進められている」と言った「理由」で、煽り、煽られて、将来への定見さえ無く闇雲に推し進められ、挙句の果ては、「改革無しに将来は無い」と主張していたはずの「教養」を志向してしまった。何という皮肉であろう。世界の人口の半分とも言われるイスラーム文化に関る視点を補充してと言うのであれば、それなりに納得できる。しかし県財政が逼迫している中では無理をしなければならなくなる。無理をして行き届かないものを用意しても、どれだけの意味があろう。

私は教養の大切さを否定する積りなど毛頭無く、むしろ大切であればこそ、改革されなければならない「教養」は、さらに問わなければならなかったはずである。金にはならないかもしれないけれども、無くてはならないもの、それを教養と考えるならば、文学は差し詰め王様格を占めるものの一つだろう。文学は現実にも過去にも未来にもそうしてメルヘンにも関わり、その想像性は無限の広がりを保証し、他者への思い遣りという想像力は、二一世紀共生の時代においては何にもまして強く要請される生きる力を養ってくれるはずである。こともあろうに、その「文学」が大学・短大から消えて行く。無くして良いところもあったことも認めよう。しかし全てを無くして良いということにはなるまい。どこかで無くしたとなると、我もまたと続く。この国の人は余程金太郎飴が好きらしい。

文部省の「国立大学の法人化」の方針もそうなのだが、この国の動きはどうしてこうも全体主義的なのであろうか。私のこれまでの経験から考える限り、少数者の存在を認めたがらない世界には、将来性を夢見る機会が狭められていたように思われる。国立大学があっても良い。県立大学があっても良い。市立があっても良い。第

三セクターの大学があっても良い。私立大学があっても良い。それぞれの大学では、それぞれの在り様が追及され、それぞれに成果を挙げるはずである。私はそれを信じる。それぞれの成果は、それぞれを刺激し、人間の可能性を開示して来たと私は評価する。しかし「ノーベル賞受賞者の数が少ないから、法人化して競わせ、受賞者を増やす」ことが目標とされる世界など、真の学問からは遠い。横並びでなくては許せない人間の狭さが、他人の成果を成果として、広く世界に紹介できてないことがあるだけで、多くの独創があったと私は思う。古来の日本人の独創を、独創を重んじている外国の人々が生かしているとしたら、そこにこそ問題があるのではないか。もし人間に「個性」が認められるとするならば、人間としての普遍性の上に立ったものでなければならないが、「競争オンリー」の世界では、先を見据えての成果は期待できまい。そもそも科学の世界では、「文部省」がおせっかいをする前から、本質的に、先を競う世界であった。変えるべきは、先の見えない文部科学省そのものだったと私は思う。

しかし、「文部省」も偶には正鵠も突く。もっともそれは文部大臣であったようだ。「短大の役割は終わった」。西岡文部大臣の話らしい。四年でなされるはずの大卒者養成を、二年でというコンセプトで始められた「短大」経営も、社会の高学歴化と社会システムの高度化、更には急激なグローバル化の中で、かつての四大卒が大学院出に取って代わられたように、短大卒は四大卒に取って代わられる時代に突入した。西岡発言も一昔前の事実。長野県短期大学も新しい時代に対処するために、懸命の努力をしたと私は思う。

神津善三郎学長をリーダーにした本格的な四大志向、さらに北條舒正学長をリーダーに進められた四大への模索は、今実現していたら大きな力を発揮していたのに違いない。しかし長野県はオリンピックを選んだ。林勝一教授（本学教養学科）が猛烈な反発を示したことが頭を離れない。フランスから日本を考え続け、日本から長野を考え、長野で長野の将来を展望しての反発だったと思われる。林教授の心配は当った。

赤字を大きくしただけのオリンピックにしても、やり方があったはずである。県民の知恵を出し尽くしてのそれなら、総括して次へのステップに生かすこともできよう。しかし実際は、教育研究の現場からさえ第二第三の仕事のために職員が引き抜かれ、その後、高等教育予算は減少の一途を辿り続けている。先を見通せないリーダーを奉じた自治体の辿る必然の道だった。そうして、未来を支える人材の養成を蔑ろにした。

然るに、オリンピック招致に敗れた山形では、そのエネルギーを、大学作りに振り向けた。東北芸術工科大学は、第三セクターの大学だが、視察に伺った時の言葉は、「オリンピック招致活動に失敗したお陰で、宿願の大学を作ることができました」というものであった。山形県・山形市が深く関っていることからも想像されるが、このコンセプトには「山形県出身者による」があった模様である。地元の知恵を、県外に流出した人々の範囲まで拡大して結集し、可能性を探っている様子が、そのメンバー一覧から読み取れる。東北芸術工科大学では、オリンピックならぬ「デザインコンペ」が全国の高校生向けに展開されていた。勿論長野県からの応募もあった。

東北の各県は、長野県と同様に、人材の流出に歯止めが掛からなかった。長男・長女は家督を相続してそれなりの生活を継続できても、次男・三男、次女・三女対策としては、外に生きる道を求めるしか方法が無かったわけだから、構造的には明治以来の在り様が続いていたと見るべきかも知れない。しかし現在ほどその「流出」が問題になる時代はかつて無かった。それは近年の少子化に関ってもたらされた。高学歴化が進む中、地元に進学可能な大学が存在しなかったために、長男・長女を外に出さなければならない状況に直面せざるを得なくなった。地元に大卒者を収容する職場が無い限り、家督を相続するはずの長男・長女までが帰れない事態に陥るのは必然であった。それだけではない。県外で幾ら素晴らしい仕事をしても、地元県内には一文の税金も入って来ないわけだから、この問題

は深刻である。

出身県に戻る場合にしても、構造的な問題がくすぶり続けている。それは、「出身県の職場を第一志望として帰って来る者がどれ程いるか」という問題である。大都市圏での就職試験に失敗し、止む無く地元へということがどれ程多いかという問題である。常に「都落ち」のトラウマを抱え、意欲的に仕事に懸るには、それ相応の時間が必要となろう。あるいは、名門大学を出た人に多く見られる傾向のようだが、大都市圏での失敗の反動を地元で晴らそうとすればどういうことが起きるであろう。一方、勝ち組は、その能力に応じた税金を、その人の住むところに落とすことになる。

こうした悪循環を断ち切るには、地元自治体の懸命の努力が要請されよう。しかも地方分権が叫ばれる現状ではなおさらである。ここでも多様性が保証されることが望ましい。県外（外国も含む）で学問を経験した者がいても良い。地元で学問を積んだ者がいても良い。地元を知った者がいて、他所のことを知った者がいて、未来を開示して行けるとしたら、何れか一方が進めることよりも確実さを益すことができるようになろう。私はその可能性を信じる。相対化こそ次の想像を保証すると考えるからである。だから県立の大学が存在することは可能性を高めこそすれ、低めることは無いと私は思う。

例えば、青森公立大学を訪ねて、設立に至る経過を尋ねた時、「県庁所在地に大学がないのは、青森だけ。青森に大学を」がコンセプトとなったということだった。そうして、空き缶集めをして貯めたお金を寄付した子供会の善意・お金が無くて敷地を提供した自治体の善意・大学誘致三十六年の宿願に託した市民のカンパ活動等を束ねたことには、人々の切実な願い、「若者の流出を青森市で食い止めてほしい」との願いが込められて居た。

例えば宮城県の場合、医療の高度化の中で、それに対処できる新時代の看護婦養成が課題になっていた。折りしも、役割を終えつつあった短大問題も抱える状況下、国家プロジェクトの看護大学設立事業を見事に生かした。この看護大学設立の問題は、自治体がそれをどのように有効利用するか、まさに自治体そのものの力量が試されることでもあった。限られた国税を限りなく生かす知恵比べと言っても言い過ぎではあるまい。

周知の如く、長野県看護大学は、それ単体として創設された。然るに宮城県の場合、観光学科をメーンにした県立大学作りの機運が芽生える中で、その可能性の薄いことを県・議会ともに検証し、看護婦養成はもとより、新たなに時代に対処するための「事業構想学部」という全国初の学部を擁する宮城県立大学を設立した。

この手法は岩手県に波及し、岩手県立大学が創設された。地元の人材養成を目的にした制度が施行され、独特の入試制度が動いている。県知事の「教育立県を目指す」という選挙公約の下で進められたことであったようだ。岩手県では、二百六十億円（県有地に設立したために、土地代がかからなかった。）を投入して、「総合政策学部（百名）」「ソフトウェア情報学部（百六十名）」「社会福祉学部（九十名）」「看護学部（九十名）」（総入学定員四四〇名）からなる岩手県立大学（滝沢村）を立ち上げた。

宮城・岩手の場合を長野と比較すると、長野は看護大学単体を目指したのに対して、同じお金を使って、宮城・岩手は、既存の高等教育のスクラップアンドビルドを達成していたと把握できる。未来を見る力、想像力の違いが現れているように私には思える。

宮城には、地元を根拠地にしていた西沢潤一がいた。岩手では宮城で先鞭を付けた西沢を招聘し、人材養成の中核に据えた。看護婦養成・役割を終えた短大問題を一挙に解決し、さらに未来へと触手を伸ばした。見事というしかあるまい。然るに長野は問題を残した。自治体における人材の必要性をこれほど端的に語ることはあるまい。

秋田では、秋田県そのものをどう捉へ現状を克服するのかが問われていたようである。伝統産業の可能性を検証し、それを発展的に継承するための人材養成と、新時代を受け止めるための人材養成の

ために、秋田県立大学を秋田市と本庄市に設立した。

そのために秋田県では、「高等教育懇談会」を組織し、その答申を実施に移し、五百億円を投入、「システム科学技術学部（百十名・秋田市）」（総入学定員三百五十名）からなる秋田県立大学を立ち上げた。秋田県立大学の場合、平成十一年四月開学で、全国各地から七百三十二名の若者を受け入れて、その中地元からは、三百四十六人が学んでいた。

理科系大学生の一人あたりの教育に掛かる費用を、相場で概算すると、三百万（養成費）× 七三二人＝弐拾壱億九千六百萬円が秋田県に残ったことが判る。この他に、生活費が加算される。若者の流出に一定の歯止めが掛かったばかりか、大きな経済効果が生まれている。二年・三年・四年次と更に積み上げが見込まれるから効果は絶大である。因みに長野県からは、既に一〇名の男子が学んで居た（大学案内に依る）。

そればかりではない。理系大学の開設に続けて、教養大学を持とうとしたと報じられる。その学長に長野県出身の前東京外語大学学長中嶋嶺雄氏が就任するという。学内では英語を使っての生活が続くらしい。ここにも知事のリーダーシップがあった。

長野県はどうであったろうか。吉村県政の二十年間、地元を支える人材養成のために何がなされたであろうか。看護大学の開学はあった。しかし産業の空洞化が進む中、収入が少なくなれば、折角養成された看護婦のお世話になる機会も自づから少なくなろう。日本有数の長寿県になった。しかし平均寿命でそれを言うのであれば、若者が減り続けていることを裏付けているに過ぎないことと言えなくもない。

妙なことに、吉村県政下では、私立大学の誘致には理解を示していた。田中県政がそれをチェックしたのは、当を得た判断だったと私は思う。なぜなら幾ら私立大学を増やしても、先立つものが無ければ進みたくても進めまい。公立大学は、税金で賄われる教育研究機関として、基本的には人々の教育の機会均等を保証し、経済的に恵まれない人々のために開かれていなければならない機関の一つであるものと私は考える。（その意味において、国立大学の法人化問題は後々、人材養成の一面を阻害することになるものと私は危惧する。）

現在の田中県政ではどうか。かつて大町市で開かれた「車座集会」に参加した折、田中知事は「大学教育」について触れ、「生徒に奨学金を持たせて県外に出し、その生徒たちが戻って来るような長野県を作る」と明言していた。集会が終了した後、有名になった名刺交換が行われたのだったが、長野県短期大学の四大化について訊ねると、別れ際に、「コンテンツが大切だよ」ということが返って来た。しかし知事の「高等教育」への関心は無いに等しいようだ。専門学校を第一に考えているらしいことも話題にしていたことから判断された。

私は、長野県短期大学奉職して二二年になったが、正直のところ長野県の高等教育行政に対しては、失望の連続であった。その理由の一つが、つい三年前にわかった。限られた予算を、より広範の義務教育受講者に対して差し向けるか、より少数者の高等教育受講者に向けるかを考えての行政であったらしいことを、信頼できる筋から聞くことができた。

これが、赤字が膨らんでからのことなのか、伝統的にそうであったのかについては確かめることができなかったが、少なくとも、昭和初期において、全国にわずかに八校しか存在しなかった女子専門学校を長野に設立したということは、七十有余年前からのことでないことは確かである。

昭和二十五年の制度改革では、長野女子専門学校を高校に格下げして存続を図ろうとする考え方もあったようであるが、結果的に長野県短期大学として再スタートし、新時代のリーダー養成のために、本来ならば四年かけて養成するところを、二年間で達成するという短大を、信州大学と試験日を同じ日に設定して実施し、「大卒者」の速成に寄与してきたことは、前向きに評価してよかろう。

どうやら、問題は、「大卒者速成」の役割が果たされ、高学歴化が推し進められる中で、文部大臣が公式の場で「短大の役割は終わった」と宣言した後のことにあるようである。ポスト短大を考えなければならないとき、オリンピック招致・バブルの崩壊・産業の空洞化と、本来地元に生活する人々に対してなされるべき配慮が、外部の人々に向かったり、後手後手になって打つ手無しと言った、住民多数への配慮の欠如した行政の結果、なけなしの教育予算さえも削減しなければならないようなマイナスシーリングが連綿と続けられて来たことを勘案すると、吉村県政の結果とせざるを得ないように思われる。

平成二年には、北條学長が吉村知事に四大案を提示し、県短の四大化の必要性を提言している。しかし無反応だったようで、漸く副知事が提言を聞くにとどまったと聞く。そもそも吉村知事は、県短教授会が四大化を視野に入れて招聘した北條学長に就任の辞令を交付するとき、四大化について口止めしたとも聞いている。

北條学長はこうした教授会と吉村知事の間で、オリンピックが終わるのを待つしかなかった。勿論手を拱ねいていたわけではなかった。同窓会（六鈴会）に働きかけて、現状のままの四大化は難しいことを説き、男女共学の四大化・現在地に拘らない等の方向性を定着させた。そればかりか、国立大学学長会の会長経験を生かして、東大・東工大・東京医科歯科大・千葉大等の学長経験者を長野に招き、高等教育・後期高等教育の必要性を、広く世に問い続けた。こうしたことは、信州にこそ相応しいことであったと、私は今でもそう思っているが、吉村知事には馬の耳に念仏、まさに馬耳東風だった。そうして、「四大化を実現できなかった」責任を問われ、北條学長は、ポスト・オリンピックへの準備の最中、県短を追われた。

この頃、長野県議会文教委員会の方々と県短四大推進委員会の、高等教育を巡る初めての会合が県議会場の一室で行われ、二回目が予定されたが、実施されないままになってしまった。

私が県短に赴任したときには、既に神津学長を中心に、長野市と将来構想を話し合っていたが、「県立短大なのに県の頭越しにやるとは何事か」と、神津学長は県庁に呼ばれ、副知事より厳しく叱責されたという。神津学長が自ら手帳を紐解いて証言している。

こうしたことから始まった県短の四大化推進の運動を、全力で支えてくださったのは、六鈴会の方々であった。かつて長野女子専門学校の生徒（学生）として、県立の高等教育機関でハイレベルの教育を受けた方々とその伝統を継承した新生「長野短期大学」の卒業生諸姉は、六鈴会（同窓会）長を先頭に、四大化の必要性を先取りし、十万人に及ぶ署名を集めて、長野県議会に陳情を重ね、その結果、県短四大化の陳情は議会採択されていた。しかし・・・・・。

この間、教授会はどうであったろうか。総論賛成各論反対は常に伴うものであるが、悔いを残さない関わりはできただろうか。私は四大委員として、六鈴会の方々と話す中で、「先生方は四大化についてどう考えているのか。議会の方々も、先生方の考えが見えて来ないと言っておられた」と質されたことがあった。私には至極当然の批判に思えた。現在もこの重さは重くなることはあれ、軽くなることは無い。

「県外に出た者が、力を付けて帰って来る」、そんな「地元」、「長野県」ができたら素晴らしい。私はその考えを否定する積りは全く無い。それは我々の目標でもある。恐らく全ての自治体の人々の願いだろう。取り分け長たる者はそう考えているであろう。そうするために何が必要かが大事なのだと私は思う。巷間に言われる如く、教育の成果は、二十年後になって見なければ判らないことだ。だからと言って手を抜けば、取り返しの付かない状況を招くだけだ。

かつて信州の人々は、次男・三男対策として、「読み書き算盤」を徹底させた。家督を相続する者はそれとして、限られた家督を細分して行き詰まることからどのようにしたら逃れられるか、そこで浮かんだことが、故郷を後にする者への餞としての「読み書き算盤」ではなかったか。ここには愛する我が子への何にも換え難い思い遣りを見ることができる。恐らく、「信州教育」の根幹には、故郷に

残るものへの教育よりも、後にするものへの教育を重視する考えがあったのではなかろうか。残った者の、自分を省みない出て行く者への思いは、出て行く者の心を支え、異郷において成功しようとの意欲を喚起させて、多くの足跡を残した。岩波書店の創業者などは、世界の人間に影響を与え続けて、その典型的な一人に数えられよう。「志を果たして何時の日にか帰らん」と歌ったのは、誰であったか。

そうして「信州教育」が、単語になって全国に広まり、かつてはそれが他県の羨望の的となり、多くの人々を信州に引き寄せた。然るに現在はどうであろうか。吉村県政は、先人が全国に先駆けて作り上げた「信州教育」を食い物にし、その空洞化を促進した。そうした現実の中で、高等教育の現状はどうであろうか。

教育は個人の価値観に基づくことであって、リーダーに左右されることではないとも思われるが、不思議なことに、地球的広がりで見れば、クリントンがブレアが、日本で見れば宮城・岩手・秋田の知事達が、高等教育の、ひいては後期高等教育の必要性を先取りして若者を集め、リーダーの価値観が多くの人々を方向付けていることがわかる。しかしこの二十年間、長野県において、リーダーからの呼び掛け、高等教育の必要性を語りかけることはあっただろうか。驚いてしまうのは、県短大の四大化について、当時現役であった複数の教育長が、学歴社会を助長するだけだとの理由で、反対を唱えたそうである。そればかりか、「教育県信州」において、選挙が行われるたび、候補者は「教育は票にならない」と公然と口にする。これは、「『信州教育』があるから」という驕りによるものか。或いはそうさせる何かがあるのだろうか。これは忌々しい問題だと私は思う。

中央から金をもらって、箱物を作っただけだったとすれば、お粗末行政といわなければならないだろう。なぜならその箱を活用できる人材があって、初めてそれが生きると考えるからである。人材養成は放って置いてできるというのであろうか。

確かにかつての信州のように、子供の多かった時代には、やろうとしてもできなかったろう。だから放って置く。しかし信州人は「読み書き算盤」を用意した。放って置いては埒があかないと考えたからだろう。ましてや、少子化の時代に、人材が流出したら、長野を誰が支えるのだろう。長野は地方分権が加速された時、一体どうするのであろうか。地元の事情に疎い人間を幾ら招き寄せても、この信州の風土に根ざした想像はそう簡単にできないと私は思う。長野は、この県に生きるもののために、将来を見据えた教育改革を早急に始めるべきものと考える。それは三十人学級を実現すれば事足りるようなレベルのものでは決してあるまい。東大進学率が向上すれば良い等ということからも遠いものになるはずである。

希望はある。若者の高等教育に関する意欲は決して失われていない。それは教授会メンバーの協力の下に実施された「長野県の大学教育に関する調査」(2002年2月)報告書によって明らかである。高校生たちは大人たちに何を希望しているのだろうか。一昔前の六鈴会のアンケート調査でもそうであったが、十余年を経ても何らの変わりも無い。それは地元にいて質の良い学問ができる場所の確保。「地元に県立の大学があったら進学したい」に六割の生徒が答えている。山の人々が海に憧れたように、海の人々は山に憧れる。万葉の昔から変わらない。だから四割の生徒が県外に憧れるのも至極当然である。

かつて高等教育を受けられなかった立場から、十分にその恩恵に浴した立場から、我々は胸襟を開いて、若者達の意欲に応えるときが来ているのではないか。次男三男対策の教育の時代は過去のものとなった今、少子化の中で、過疎化の波は一向に治まらない。地元に生きる手立てが無いとき、離れるのは止めようの無いこととなろう。地元に研鑽の場が無いとき、外に場を求めるのを止めることはできまい。地元に仕事が無いとき、里を去った若者は、帰れるだろうか。

それはお金があるからやることではなかろう。お金が無いからこそやる必要があるのだと私は思う。青森公立大学はどのように設立

されたのだったか。いや、信州には伝統としてそれがあったと私は思う。それを再生させるだけのことであろう。そうして、長野の地域地域で実施されているユニークな子育て・教育を、受験競争の濁流に流し込んでしまうのではなく、そのユニークさから生まれるオンリー・ワンを目標に、長野県の教育全般を考えるときに差し掛かっているのだと私は思う。従って、短大の在り様を、全国どこにでもあるようなものに変えるのなら、むしろ変えないままでユニークさを競い研鑽を積むことも選択肢の一つだったと思うのである。

鷲沢長野市長は、長野市の若者層の空洞化を危惧し、県短の「短大改革」を批判したという。市長は、短大の四大化に、若者の定着を見たのに違いない。清泉女子短大の四大化に際しては、男女共学の道を探れないか申し入れを行ったと聞く。

少子化の時代には、県土を支える人材の養成が欠かせまい。それを個人の財布に任せておくだけ、長野の個人は裕福だろうか。産業の空洞化はその意味で象徴的だ。仕事は外から遣って来る。そういう時代は終わった。外から来たものは、やがて去って行く。安い労働力が提供されるならば、仕事は外国にさえ移動する。それが現実である。だとしたら、長野でしかできないことを創出しなければならないだろう。そのための教育・研究を私は志向する。長野はこれまでは土地と労働力を提供することで成り立って来た。しかしそれが中国に取って代わられたとき、過去に何を積み残して来たかを考えるべきだろう。中国では、一人っ子政策の中で、四人の祖父母がバックアップしての子育てが行われている。何れ、「土地と労働力」ばかりでなく、「知的生産」の面でも飛躍的発展を遂げるものと私は予感する。自分の懐しか考えない国の御仁とは、いささか異なった価値観の存在を中国に感じるからである。国民が営々と稼いで来たものを、アメリカの利権争いの尻拭いに供せんとする方向違いの「アメリカのポチ」と、国民の生活向上のために供せんとするものとの違いとして見ることもできよう。その意味でも、中国的在り様に注目すべきものと思われる。

二　一冊のゲラ刷りから

教員に成り立ての頃、長尾善又氏より、戦後の中国抑留について、お話を伺ったことがあった。特に印象に残っているのは、抑留中の日本兵に、中国の人々がどのように対したかということと、中国政府が戦後賠償を放棄したということである。このうち、前者については、捕虜として厳しい生活を覚悟していたが、それが杞憂であったこと、そればかりか、日本人が白米を主食としていることを重視して、「捕虜に白米を食わせるのか」という中国の多くの人々の反発を抑え、白米を提供してくれたということであった。後者については、第一次大戦後のドイツの例があり、中国が日本に対して同様の戦後補償を求めたとしたら、奇跡の復興は難しかったかも知れない。少なくとも遅れていたことは間違いない。

当時、私は家族を抱えて大学院に籍を置いていたため、仕事に追われ、新聞もろくに読めない日を送っていい、大切なニュースを捉えきれないでいたこともあって、こうした事実を正確に知ることができなかった。私の実兄も、上海で戦った経験を持っていた。しかしながら、そうした待遇があったことは一度も耳にしてはいなかった。長姉の嫁ぎ先に海軍軍人だった方がいて、年に何回か酒宴を開いては、戦場での自慢話を並べ立て、徴発した酒の風呂に入ったこと等が話され、最後には「陸軍が阿呆だったので戦争に負けた」「いやいや海軍が弱かったので負けた」と、責任の擦り付け合いをするのを見るにとどまっていた。従って、日本の戦後復興については、教場で教えられたまま、アメリカの支援と朝鮮特需によってなされたものと信じて疑わなかった。特に、昭和二〇年四月生まれの、東北の寒村育ちには、DDTによる虱駆除・昼食時の脱脂粉乳等、敗戦後の貧しさを極めた状況が鮮明に記憶されているので、疑う余地等全く無かったのである。

勿論、アメリカの脱脂分乳が何であったのか、当時の私に分る訳も無かったのだが、まずさだけは良く判って、あの時間は、私個人

にとってはあまりうれしくない時間の一つであった。昼になるとアルマイトの食器が机の上に配られ、大きな倭鍋から金属製の大きな杓子で、決まった分量が注がれる。すると一斉に飲み始める。最初は珍しさが先行して面白くもあったが、家で飼っていたヤギの乳よりもまずいことを知ると、鬱陶しさだけが残った。そうして、脱脂粉乳は、転向して来た生徒への虐めの具に供された。

当時は何が何だか訳も分らなかったのだが、それが何であったのかについては、高校生になり社会科を学習する中で認識できるようになっていた。それがアメリカの支援と朝鮮戦争特需であったということであった。確かにそれもその頃までのこととしては正しい答であったに違いない。

しかしながら、日中国交回復三十年を契機に、敗戦以後の日本と中国との関係が、当事者によって語られる時代になり、戦後史研究を仕事とする人達には既に常識となっていることなのかもしれないが、次々に新事実が明らかにされ、私の頭の中では、断片的だった事柄に繋がりが見えて来るようになった。そうした状況下、長尾氏の証言が、明確に裏付けられ、(注1) 特に周恩来の、日本人捕虜に対して行った「白米支給」の事実は、周恩来の人となりを考えさせて余りあるばかりか、そうした行いを為し得た価値観が何によってもたらされたのか知りたくなった。

折しも、実兄が自分史を書き出した。校正を手伝いながら、そこに何が認めてあるのか知ることができ、かつての自慢話の意味が理解できるようになって来た。

文学史等で、小林多喜二の生き様を知った時には、自分の長兄は、上海で戦い、今目の前にいることが気になった。確か十八歳の時だったと思われるが、長兄に、「小林多喜二は戦争に反対して嬲り殺されたと教わったのだけれど、兄ちゃは何で戦争に行ったの？」と尋ねたことがあった。「そう言う時代だったんだ。・・・」。長兄は時代の所為にした。「本人の責任は？」。押し黙ったままだった。あれから四十年、兄が漸く総括した。その二章には、「軍隊とは、人間を一つの枠の中に閉じ込め、人間の真の能力を拘束した集団に過ぎなかったのだ。確かに、犯してしまった戦争と言うものは、愚かな行為であったと思わざるを得ない。人間としての語らいの中から、愚かな自分と言うものを発見できた。『聖戦』と言う名の下に、敵味方を問わず、有能な人物が亡くなり、剰え、日本の進路に大きなダメージをもたらした一軍閥の野望と、誤った救国観がもたらした戦いであった」いう件がある。自分の生きて来た過去を振り返り、八十歳を越えて斯く総括した実兄を受け入れようと思う。

会津の寒村に、教員夫婦の長男として生まれた人間が、どのように戦争にのめり込んで行ったのか。「そう言う時代だったんだ。・・・」。ここには二つの「時代」がある。一つは、昭和二〇年五月十五日の敗戦に至る時代、もう一つは、会津の特殊な状況であるが、戊辰戦争以来の賊軍のレッテル下という時代である。この「時代」は、竹下首相が辞任して、その後継者に伊東正義が推された時まで続いていたと私は見ているが、会津の人間がウダツを揚げることのできる所と言えば、警察・軍人・教員等、限られた世界しかなく、私の家は、祖父を除いて、他の男兄弟は、海軍・陸軍の軍人となっていた家系だった。戦後になっても、親戚には、防衛大学校の教員(又従兄弟)やら、防衛大学校第一期生(従兄弟)等が連綿と続き、「貧乏教員の子沢山」の三男(私)も一時、高等教育を受ける一つの方策として、防衛大学進学を視野に入れたことがあった。

このように、育った家庭環境・地域的環境・社会(国家)環境が押しなべて軍人を肯定する状況に有る時、一人の子供が軍人を志向したとしても仕方がないだろう。また、長兄の中学時代のアルバムを見ると、軍事教練の写真が列挙されていて、当時の在り様が垣間見られ、寒村の「総領の甚六」が、寒村を出て、不安の中に石川町というより広い世界に関り始め、青春時代は陸軍士官学校を目指して、生まれて初めての勉学と柔道に専心し、肺浸潤に倒れて受験はできなかったものの、日米開戦の当日、北会津郡湊村大字原で越冬のための作業をしていた青年が、身辺整理をして戦場への決意を新

たにしていたとしても何らの不思議はない。それが、「そう言う時代だったんだ。・・・」ということであったのに違いない。しかしながら「一軍閥の野望と、誤った救国観がもたらした戦い」という認識には至るべくもなかった。そこに至るためには、戦場でのことは言え、上海での多大の加害と自分自身の体への被害があった。それに復員後の公職追放。この後は、農家の後を継ぎながら、苦学して中学の国語教師となり、一線を退いてからは、故郷の発展に寄与しようとして来た。「とことん議論し、誠意を以って対処する」ことが貫かれていた。

興味深いのは、教壇に立っていた二十五年間、「初年兵教育係」を勤めた人間が戦後民主主義教育をまっとうできるかと問い続けていたことである。「愛の鞭」が生きている時代ではあった。

ここには、一人の人間の真摯な反省と、それを実践しようとする志がある。然るに自らの「非行」を認めない面々が存在する。つい最近も自民党の江藤議員は南京事件を歪曲する見解を述べた。小泉首相の靖国神社公式参拝等も、その一つと考えてよかろう。一体どうしてこうした問題が頻発するのだろうか。私は、そうしたことを平気で繰り返す人間の、無知と傲慢さがなさしめるものと考える。

幸い会津には儒教があった。徳川幕府以来のものかどうかについては詳しく判らないが、白河街道の原宿にもあった。(注2) 座敷には「温故知新」(『論語』「為政」)が掛けてあったし、土蔵には『論語』『孟子』等があった。「温故知新」を細かに教えてくれたのは、兄だった。それに学校における当時の漢文教育の存在。それは単なる知識に訖るのではなく、実生活の指針として生きていた。戦後の民主主義が戦前の考え方に取って代わられようとしていた時代にも、勿論現在にも、大きな規範として生きている。

当時、軍体内では「私的制裁」が横行していたようで、そのことに触れ、「自分が殴られた経験から、『将校に昇進した暁には、この行為は根絶しなければならない』と考えていた」と記しているが、この「私的制裁」を許す心的構造こそは、或いは『論語』『孟子』の対極にあるものなのかもしれない。人を人と思わない傲慢さ。その「人」が、例えば「中国人」の場合、或いは「朝鮮人」であった時、「侵略戦争」を平気で仕掛ける「野蛮」に至るのであろうし、それが「日本人」である時には、様々な形態の差別問題・陰湿ないじめが頻出することになるのだろう。

恐らく、この野蛮性から自らを解き放つためには、礼節を知る必要があるに違いない。それは人間への礼節であり、一つには具体的な個人へのそれであり、人々が営々と築き上げて来た文化へのそれなのだと思う。そのためには確かな「真実」を学ぶ必要がある。しかも過不足の無いこととして。

昭和十九年夏、江南を転戦中に、寒山寺に思いを馳せ、「月落ち、烏鳴きて、霜天に満つ。・・・」を思い出したと記しているところから、私は教育の果たす大いさと、学習の大切さを痛感する。座敷に掲げてあった「温故知新」の意味は小さくない。

しかしながら、八十歳にならないと自らが見えて来ないとなるとそれは困る。「温故知新」は狭い世界での「温故」では始まらないということを、ゲラ刷りは私に教えてくれる。つまり出征前に、何故中国へ戦いに行く必要があるのか、中国出兵は妥当なことなのかについて、「知新」、すなわち自らの行動を支える根拠を見つけなければならなかったのに、一方的に与えられた社会通念(共同幻想)に無批判に追随してしまったがために、兄は、八十歳の反省を余儀なくされたのである。もっとも、広い世界に「温故」の対象を求め、自らの行動根拠を見つけていたとしても、中国出兵はなされていたと思われる。なぜなら、兄は「そういう時代」を根拠にしていることでもわかることだが、この対極には小林多喜二の生き様があって、出征を拒否したり、戦闘を拒否したりしたら、忽ち嬲り殺されていたであろうことが想像され、命を賭して、反戦を唱える力を、兄に期待することは不可能であったと考えるからである。その意味で、政治犯として網走署に投獄された宮本顕治の在り様や、歴史学者津田左右吉の存在は大きい。

私は今、戦後民主主義を当たり前の価値観として、兄の告白録を捉えているのだが、信州に赴任して知ったことがある。それは、キリスト者の懺悔（告白）を通して知ったことで、戦中のキリスト者の日課が、宮城遥拝から始められていたということである。キリスト者とは少なくとも聖書によって生きる人々のことであろう。その方達でさえも、国是としての宮城遥拝に従っていたのである。その方達も、戦後五十年にして初めて、キリスト者としての自らの生き様を俎上に載せ、自己批判を試みたのに違いない。

それでは何がそうさせたのであろうか。兄の理屈では「『聖戦』と言う名の下に」「一軍閥の野望と、誤った救国観がもたらした戦いであった」ということだが、私はここに、江戸期の国学者の妄想があったと見る。それは極めて独善的な考えであって、普通に考えれば如何に愚かなことか、一目瞭然なのだが、『古事記』神話を事実と認識した思考様式と構造は全く同じと考えられる。特に中国に対しては、平田篤胤などの考えに拠ったものと私は考える。

（注1）『地の塵』では蔣介石のこととして紹介されている。

（注2）岩波思想体系39『近世神道論の前期国学』の解説は、保科正之の時代に、山崎闇斎を会津に招いている事実を指摘している。正之自身も儒学を修めていたようで、少なくともそのころまで遡ることができそうである。

三　『古事記』の相対化

古事記学会は今年、三十回の記念大会のイベントとして、韓国・中国の研究者を招き、『古事記』研究の基盤を、アジアの広域に広げようとした。これは小さいことではない。(注1)

これまで既に取り上げられていることだが、チベットには、『竹取物語』に良く似た『班竹物語』が存在する事実が報告された時、学界には少なからぬ衝撃が走り、以来、『竹取物語』の解説にはその論文名が記される。こうした視野を広げた研究成果の一つを指摘するだけでも、近隣諸国には似たような話があることがわかり、日本の国内に閉じこもったままでの研究には、自づからの限界があることが、直ぐに理解されよう。

「竹」を機軸にした話根に則してちょっと考えるだけでも、①話根の、チベットから日本への移動、②話根の、日本からチベットへの移動、③日本・チベット以外から、チベットへ・日本へ等という、話根の移動や、そのように移動した話根が、それぞれの国でどのように原型が保たれ、どのように変わったか、更にはそれらの一つ一つの辿ったであろう必然性を問うこと等、山ほどの問題が横たわっていることがわかる。それらの問題に無関心のまま、「日本からチベットへ」、「チベットから日本へ」を幾ら声高に主張してみても、あまり説得力のある論理を構築することはできないだろう。神話のレベルにおいてはなおさらのことで、既に比較神話学の指摘して来た多くの成果によって明らかである。しかしながら、『古事記』に関ることは、日本のこれまで辿ってきた特殊な事情のために、どうしても蛸壺の論理に立つことしかできず、世界に開放されたなかでの相対的な対象把握を目指すことすらできなかった。

人間の思考様式を考えてみると、例えば「竹」を巡る文化状況に着目するだけでも、そこには、筍を食すること・竹を用いて籠を作ること・竹を用いて楽器を作ること等、何処から何処へを問題にすることの意義を無化してしまうような、多所に個別発生すると見て差し支えないようなことが起こっていて、竹に関る生活を営む人々には、それぞれに起こることとみなすこともできそうである。竹の木に対する成長速度、桐の木のような例外もあるけれども、竹の木に対する「空洞性」等は、人々の関心を引き付けるのに大きく作用したことと想像される。

『古事記』神話には、伊弉諾尊が黄泉の国を脱出する時、黄泉つ醜女の追跡をかわそうと髪に挿していた櫛を放り投げる場面があるが、その櫛から筍が出て来たということは、櫛の材料が竹であった

というばかりか、あっと言う間に食せるほどになってしまう竹の習性に基づいた表現と見て差し支えなかろう。えび蔓にしても、竹の木に対するのと同様、蔓の木に対する習性として、成長の速さを知っての表現と考えられる。

古墳出土の竹の小刀は、臍の緒を切るためのものであったらしいが、第二次大戦中、オランダ軍は、バリ島の竹を用いた木琴状の楽器を、竹は武器になるという理由で、禁止したとされるが、竹槍の存在も広範囲に確認できる。

このように、人間が生活する中で体験することを巡っては、全く関りの無い世界に、同じようなことが起こり得ることを確認できる。そればかりか、同じような現象に対して、人間の抱く幻想が異なっていることもある。

例えば人間の死に対して、どのようなことをして来たかを考えてみよう。人の死に対して、葬礼という儀式を以て対処するのは、どうやら人間だけらしい。そればかりか、ギリシャの昔から、人間は唯の一度だけしか死ねないことも知られていたようだ。

我々日本人は、埋葬や火葬を採用して、現在に至っているが、周知のように、火葬はインドの葬方であり、日本の公式の記録では、入唐僧の道昭が、火葬による最初の被葬者となった。天皇家でも、この後持統天皇が火葬され、大内陵に天武天皇と共に合葬されている。因みに天武は火葬されたとは記されていない。

埋葬はと言えば、大化の改新の詔にあるように、「西土」の葬方に倣って採用したものである。

その詔の内容から類推する限り、日本には「死体」を放って置く風習があったらしく、死して後、何れ腐り果てて行く肉体の汚さを「蔵す」ために埋葬という方法を採用したことが推測される。日本の民俗の「両墓制」とか、「洗骨」・「仮墓・本墓」等という言葉を思い起こせば、亡骸は、一旦放置されて、改めて遺骨を回収して洗い、本葬したしたものと考えられるから、あるいは、『日本書紀』に記される「葬苑」等は、洗骨する状態になるまでの仮墓のような所だったのかもしれない。もしそうだとすれば、次の「薄葬令」の証言するところが大きくなる。

甲申（二十二日）に、詔して曰はく、「朕聞く、西土の君、其の民を戒めて曰へらく、『古の葬は、高きに因りて墓とす。封かず樹ゑず。棺槨は以て骨を朽すに足るばかり、衣衾は以て宍を朽すに足るばかり。故、吾、此の丘墟、不食なる地を営りて、代を易へむ後に、其の所を知らざらしめむことを欲す。金・銀・銅・鉄を蔵むること無。一ら瓦の器を以て、古の塗車・芻霊の義に合へ。棺は際會に漆ること三過せよ。飯含むるに珠玉を以てすること無。珠襦・玉柙施くこと無。諸の愚俗のする所なり』といへり。又曰へらく、『夫れ葬は蔵すなり。人の見ること得ざらむことを欲す』といへり。廼者、我が民の貧しく絶しきこと、専墓を営るに由れり。爰に其の制を陳べて、尊さ卑さ別あらしむ。夫れ王より以上の墓は、其の内の長さ九尺、濶さ五尺。其の外の域は、方九尋、高さ五尋。役一千人、七日に訖しめよ。其の葬らむ時の帷帳の等には、白布を用ゐよ。轜車有れ。上臣の墓は、其の内の長さ濶さ及び高さは、皆上に准へ。其の外の域は、方七尋、高さ三尋。役五百人。五日に訖しめよ。其の葬らむ時の帷帳の等には、白布を用ゐよ。擔ひて行け。蓋し此は肩を以て輿を擔ひて送るか。

下臣の墓は、其の内の長さ濶さと高さとは、皆上に准へ。其の外の域は、方五尋、高さ二尋。役二百五十人、三日に訖しめよ。其の葬らむ時の帷帳の等には、白布を用ゐること、亦上に准へ。大仁・小仁の墓は、其の内の長さ九尺、高さ濶さ各四尺。封かずして平ならしめよ。役一百人。一日に訖しめよ。大礼より以下、小智より以上の墓は、小き石を用ゐよ。其の帷帳の等には、白布を用ゐよ。庶民亡なむ時には、地に収め埋めよ。其の帷帳の等には、麁布を用ゐるべし。一日も停むること莫れ。凡そ王より以下、庶民に至るまでに、殯営ること得ざれ。凡そ畿内より、諸の国等に及るまでに、一所に定めて、収め埋めしめ、汚穢しく処処に

散し埋むること得じ。凡そ死亡ぬる時に、若しは自を経きて殉ひ、或いは人を絞りしめ、強に亡人の馬を殉はしめ、或いは亡人の為に、宝を墓に蔵め、或いは亡人の為に、髪を断り股を刺して誄す。此の如き旧俗、一に皆悉に断めよ。或本に云はく、金・銀・錦・綾・五綵を蔵むること無れといふ。又曰はく、凡そ諸臣より民に至るまでに、金・銀を用ゐること得じといふ。縦し詔に違ひて、禁むる所を犯すこと有らば、必ず其の族を罪せむ。

岩波古典文学大系本『日本書紀』下「孝徳大化二年三月」

岩波日本古典大系『日本書紀下』の頭注によれば、「古の葬は、高きに因りて墓とす。封かず樹ゑず。」は『魏志』「武帝紀」、「棺槨は以て骨を朽すに足るばかり、衣衾は以て宍を朽すに足るばかり。故、吾、此の丘墟、不食なる地を営りて、代を易へむ後に、其の所を知らざらしめむことを欲す。金・銀・銅・鉄を蔵むること無。一ら瓦の器を以て、古の塗車・芻霊の義に合へ。棺は際會に漆ること三過せよ。飯含むるに珠玉を以てすること無。珠襦・玉柙施くこと無。諸の愚俗のする所なり」は「文帝紀」に拠ると確認されている。

この資料に拠る限り、埋葬が公式の葬法として採用されたのは、「西土の君」の考え方に従った結果であったことがわかる。この「西土の君」の考え方は、何によってもたらされたのだろうか。「大化の改新」があったとしてだが、この時期、既に遣隋使が派遣され、「西土」の知識が入って来る可能性は十分あった。

この後、火葬が行われるようになる。道昭がチベットへ行ったという記述は無い。おそらく、唐において体験したことを実施に移したということなのではあるまいか。このことに関しては、何の手がかりも持たない。今後の課題とするしかない。

『天寿国繍帳』「亀背文」によれば、仏教に関して、もっとも深く理解したであろうとされる聖徳太子が火葬に付されず、「天寿国」へ行くと称していたとあるが、これはどうしたものか。

幸徳天皇が従った「西土の君」の考え方とは何によったものなのか。「夫れ葬は蔵すなり。人の見ること得ざらむことを欲す」というのであれば、焼いてしまうのが合理的であろう。そう記さないということは、そうしてなかったということなのに違いない。とすれば、大化二（646）年三月時分、唐に於いても、火葬は一般化されてなかったということか。

二千二年九月、初めてチベットを訪れ、葬礼の多様性に驚いた。チベットといえば、鳥葬が直ぐに頭に浮かぶのだが、実はそればかりではなかった。火葬があり、土葬があり、水葬もあった。ガイドさんの説明によると、経済的な理由によって、それぞれの方法が選択されるらしい。因みに、水葬は、経済的に最も低い方達の葬法とのことであった。ラサに向けてマイクロバスがスタートした途端、ガイドさんが、「チベットでは、川魚をたべません。何故でしょうか？」と謎賭けをする。皆目見当が付かない。道路の右側を流れる大河に人影が無く、不思議に思い出したら、謎解きがなされた。「チベットには水葬があるのです」。成る程、死体を食べた魚は食べられないというのであった。

（注1）「古事記学会」発足当初から参加しておられた山中宏樹氏（元成蹊大学附属高校教諭）は、「初めの頃は、国学院大学の方々が、『古事記』は『神典』だからという理由で、自由な解釈をゆるさなかった」と当時を振り返って居られた。